



船越 隆子

翻訳家

もう20年近く前になるだろう。NHK衛星第1放送(当時)でアメリカの園芸番組をシリーズで放送することになり、その吹き替え翻訳を担当させてもらったことがある。

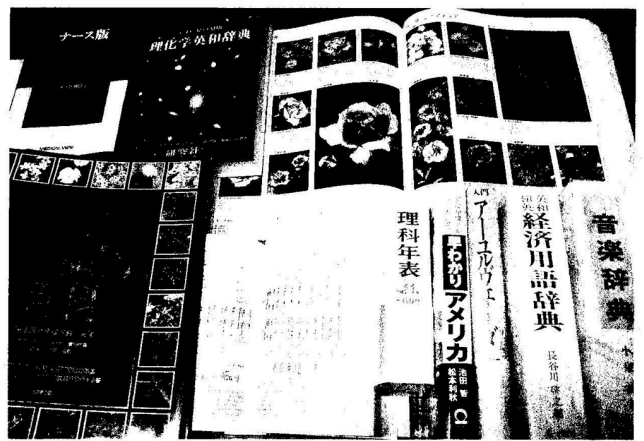
記念すべき初回の放送を皆で見ようと、NHK局内で部長ら幹部もテレビの前に集まってきた。そして番組が始まり、最初の植物が出てきたところで、見ていた1人が口を開いた。

「今の植物、名前が違うんじゃない？」

私は真つ青に。英和辞典に載っていた植物名を、ろくに調べもせずにそのまま使ってしまったのだ。英語名は同じでも和名の違う同属の植物だった。英和辞典ではそこまでの区別がなかった上に、写真と照らし合わせても確認していなかった。

「これは、植物に詳しいが歌つような鳴き声を出すことは比較的知られているが、当時は何を調べても、そんな記述はまったく出てこなかった。ミステリー小説を訳した際には、こんなこともあった。音楽がテーマになっていて、謎解きにはどうやらバッハが関係しているようなのだが、私にはその意味がさっぱり分からない。だから肝心の謎解きの部分がどうしても訳せないでいた。そうしたらピアノの得意な友人が「それはバッハのスペル(BACH)をABCで表す音階にひっかけているのではないかと教えてくれて、無事に訳を完成させることができた。昔は、調べものというと、まず図書館へ行き、大きな図鑑や事典・辞書類などの資料をあれこれ調べるのに丸一日かかったものだ。それでも分からない場合は、外国のことであればその国の大使館、専門分野ならば研究機関、動物園、植物園などの施設に電話をしたり訪ねたり。実にアナログ的だった。けれども昨今は、インターネットが主流になっていく。たいいのことは、ネットを検索すればヒットしてくれる。あとはそのサイトの説明の信頼性を確認すればいい。検索して驚くのは、どんな分野や物事でも、たとえ相当にマニアックなことであっても、必ずといっていいほど、非常に詳しい知識をもった人のホームページ(HIP)があること。昨年私の翻訳で出版した小説「フレイキング・ボイル」(小学館文庫)には、

船越さんが翻訳の際に使っている事典や辞書類。最近ではネットでの調べものもできるようになり便利になった



## 確認の大切さ痛感

### 調べものがいのち

カジノの場面で「クラブ ネット」に出てくる。日本ではあまりなじみがないが、ネットで調べてみると、詳しいルールだけでなく、攻略法まで説明してくれるサイトもあった。しかも今は、大学や研究機関の方たちがそれぞれの研究分野とメールアドレスを公開している場合もあり、分からないことは、ただでなく、いろいろな方にその専門家の先生にメールを出して尋ねることもできる。(徳島市在住)

### ネットで専門家に相談も